

資料の提供か、成果の発信か

白石, 良夫

<https://doi.org/10.15017/4742084>

出版情報 : 雅俗. 18, pp.126-129, 2019-07-16. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 :



資料の提供か、成果の発信か

白石 良夫

オカルトは減びない

オカルトとサイエンスは背中合わせ、とよく言われる。これはけっして比喩ではない。人類が普通に体験してきた事実から導き出された成語である。

日蝕もハンドパワーも、それを最初に目撃体験したものには、超常現象、摩訶不思議であった。だが、説明がつけば、それが科学になり技術になる。オカルトはサイエンスとテクノロジの産みの親である。

科学の歴史は、オカルト（未知）をサイエンス（既知）に塗り替えてゆく営みであった。では、サイエンスがオカルトをどんどん侵食していつて、すべての現象をサイエンスで説明できる日が来るだろうか。

「人間って何だ？」という問いは、人文学が独占していた古典的な課題であった。だが、AIの進歩によって、こんにち自然科学の領域で急浮上してきた。自然科学にとってこれまで、人間は「何だ」と問うまでもない存在であったが、いまや、得体の知れないもの（オカルト）として、説明が求められているのである。

江戸に出掛けて江戸人の話を聞け、とは？

先人はさまざまなことを文字にして記録に残してきた。客観的事実の記述から自己の内面の声まで。多種多様ではあるが、一つ共通するのは、書き手の既知の範囲内で書かれているということである。どんなに独創的な思想でも、空想や妄想を逞しくしても、それはそのひとの既成の知識から生まれる独創であり空想であり妄想である。当然、文学も同様である。

人類の知識は、未知時代と既知時代に分けられる。未知時代の文学作品を読み解くには、まずもって未知時代の作者（あるいは読者）になれというのが、わたしの育った古典研究の環境であった。「江戸時代に出掛けていつて、江戸人の話を聞け」の中野先生の常套句は、近代人の知識と感性で古典を読むという訓戒で、それ以外ではない、と解してきた。ずっとそう解してきたし、この歳になって宗旨替えるつもりはない。

わたしは何度か、中野先生のご託宣をつぎのように言い換えたことがある。

「錬金術は、パラケルススに学べ」

「天動説は、コペルニクス以前の知識で語れ」

鍊金術も天動説も、現代の科学（既知）でもって説明できる。客観的にはそのほうが正確である。しかしそれでは、未知時代の知識や感性を虚心に見る目が曇ってしまう。

国文学者による古典の読解とは、畢竟、古典時代の読書を再現し体験することである。日蝕を超常現象と感ずることであり、リングが落ちるのをお節介に説明しないことである。鍊金術を最新技術と信ずることである。注釈はそのための補助である。それを契沖は「万葉を読むには同時代資料より帰納すべし」と言った。仁斎と徂徠は「いにしえのことはいにしえに学べ」と言った。仁斎に学んだ中村幸彦先生の教えであり、わたしの学んだ研究室の伝統であった。江戸の作品は江戸の作者（あるいは読者）の世界で読む、である。

アマの注釈、プロの注釈

左は小城鍋島文庫本『和学知辺草』（寛政年間成立）の一節。

日本と称し始めたる事も東国通鑑に始て見ゆ。吾朝は天智天皇の御宇に当れる也。

これに注釈をつけたい。

演習で学部生がつけてくる注釈は、おおくは歴史辞典から「東国通鑑」と「天智天皇」を引いて、それで済ませる。

大学院生にもなると、さすがにそれでは許されない。「東国通鑑」本文を通覧して「日本」の語を検索する。「天智天皇」時代との関連も確認する。「日本」呼称の嚆矢が「東国通鑑」なのかどうかを調べ、もしそれが『和学知辺草』の記述と一致していれば、

著者の知識の正しさを認める。齟齬（そご）していれば、著者の認識不足（間違い、勘違い）と見なす。

学部生よりもレベルの高い演習である。だが、これでは、既知（近代人）の知識で未知時代（近世）の作品を読んでいることになり、近世人の読書体験、読書空間とは言えない。そこで、プロの注釈だと、こうなる。

『秉燭譚』巻二「日本国号ノコト」に、「東国通鑑第九、新羅文武王十年八月ノ下ニ云「倭国更号日本、自言近日所出、以爲名」ト。コノ年ハ、唐ニテハ高宗ノ咸亨元年、本朝ニテハ天智天皇ノ九年ニアタル。本朝ニテシラザルコトナレバ、從ガタシ。然ドモ唐以上ノ書ニ、日本ト云コトミエザレバ、此ノ時分ヨリコノ字ヲ用ヒラレタルニヤ」とある。『東国通鑑』は李氏朝鮮の史書（一四八四年成立）。「天智天皇の御宇」は、大化の改新（六四五年）から壬申の乱（六七二年）あたりまでを指す。

『秉燭譚』（伊藤東涯著）を引用すれば、それで作品の時代（寛政年間）の読書空間を再現したことになる。これで十分であり、東涯の認識の穿鑿（せんさく）は、やって悪いとはいわないが、『和学知辺草』の読解には、ノイズにしかない。

近世の読み物で、例の「香炉峰の雪はいかならん」の話を紫式部のエピソードとしているのに出会ったとき、当然、違和感は持つ。だが、注釈のプロであるなら、プロであるがゆえに、作者の無知と嘲笑して、無下に斥けてはいけない。虚心坦懷（しんしんたんわい）になって、紫式部説の存在を考えてみる必要がある。

そして、紫式部が御簾を捲き上げたという記述を『和漢三才図会』や『国華万葉記』に見つけたとき、そして井沢蟠龍がそれを俗説として話題にしていることを知れば、「紫式部御簾を掲げる」は、作者の無知ばかりではなかった、嘲笑は古典に対する専門家の傲慢だったことを思い知るだろう。古典の読み解きには、われわれ（既知の時代）の正説も俗説も謬説も捏造説も、みんな平等である。

研究資料の提供か

「通読の便を考慮して」というのは、今では、古典テキストの凡例の決まり文句である。考慮して、底本にない句読点や濁点・送り仮名を補ったり、段落を設けたり、鉤括弧をつけたり、仮名遣いを統一したり、あるいは仮名を漢字表記にしたり、誤字脱字を訂正したり、といったことをする。

一方、こういった行為を不本意と感ずる専門家の声もしばしば耳にする。そこに校訂者の解釈（恣意）が入り、読み手をミスリードする、と。本当は純粹な學術的翻刻がしたい、通読の便は、所詮、読者サービスにすぎない、と。商業主義を排し、どこまでも原本（底本）に忠実な、良心的な翻刻をやってみたい、と。

學術的で良心的な翻刻とは、通読の便という縛りから解放された、いわば素のままのテキストを意味するらしい。研究資料として偏りのない分野で利用できる、そのためには素のままのテキストであることが望ましい、と。

われわれの研究会では、『十帖源氏立圃自筆書入本』（笠間書院

刊）を出す前に、素のままのテキストを佐賀大学の紀要に掲載した。だが、これは決して、良心的で學術的な翻刻を目指したわけではない。校訂の方針を執筆者十数人が共有するには時間的ゆとりがなかったので、とりあえず出版のための準備稿と位置づけて、素のテキストを公開しただけである。

紀要のテキストでは、したがって、忠実に翻字し、句読点は補わない。濁点もあるものだけに付してゆき、朱筆の濁点は朱筆であることを明確にする。本文の不審箇所も改めない、まったく通読の便を考慮しないテキストであった。

たしかに、これでもって、研究資料として偏りのない分野で利用できるテキストにはなった。だがこれでは、古典研究という偏った分野へのテキスト提供でしかない、というジレンマが、俄然、頭をもたげてくる。いかほどの数のひとが、こんなテキストを必要とするのだ。

古典のテキストはそもそも、限られた研究者のためにあるものなのだろうか。研究者が同業者向けのテキストを作って、それをこそ學術的良心的だ、などと称するか。「研究資料の提供」と聞こえはいいが、所詮、国文学者の自己満足ではないか、誤解をおそれずにいえば、専門家の我儘ではないのか、と思われてならない。読者をミスリードするリスクは避けたい、それは失敗を恐れるがゆえの逃げ口上にすぎないのでは？ 素のままのテキストとは、学問の手が入っていない（ということとは非學術的な）翻刻の謂いではないのか、と言いたくなる。

研究成果の発信か

その後刊行した『十帖源氏立圃自筆書入本』は、「通読の便」を考慮したテキストであった。が、いささか高値になって、専門家向けの域を脱することはできなかった。高値になったのは、科研の報告書を兼ねたため、このときも、研究成果の発信という共通認識で原稿作成する時間がなかったからであった。それに、この出版を研究資料の提供であれかしという発想が、校訂者間に根づよくあったことも否めない。

わたしは編者の独断と特権でもって、それにささやかな抵抗を密かに試みた。

この版本には、読み癖の濁点（違和感のある濁点）が、一部であるが、反映されている。研究資料としてこれを国語国文学界に提供することにこだわるならば、濁点のあるものについては、違和感があっても、濁点は残す。だが、おなじ語でも濁点がなければ、慎重を期し原本に従って、濁点は補わない。これが素のままの本文、良心的学術的な「研究資料の提供」である。

わたしのささやかな抵抗とは、濁音で音読したであろうと考えられる語には、底本に濁点がなくても、積極的に、片っ端から濁点を補ってゆくことであった。偏った研究分野のための研究資料の提供ではない。近世初期源氏音読を再現したテキスト、それをこんにちの読書界に発信するのである。

素のままのテキストであるなら、濁点を付すかどうかの判断に狂いはない。一方、わたしのテキストには、判断ミスがあるはずだ。批判の余地が多く残される。だが、批判され修正されるのが

学問である。批判され修正されるためには、まずそれを発信しなければならぬ。

白か黒かではない

勿論、国文学に限らず、どんな学問にも、白でなければ黒、黒でなければ白、などというものはない。小城鍋島文庫本『十帖源氏』の翻刻は、紀要のものも単行本のものも、どちらも研究成果の発信であり、同時に研究資料の学界への提供であった。研究資料の提供は研究成果の発信であり（べきであり）、その逆でもある（べきである）。それを際立たせるために、あえて、黒とはなにが黒なのか、白とはなにが白なのかを、図式化してみたのである。

われわれは神ならぬ人間だから、おなじ人間をミスリードする、それを百パーセン回避することは不可能である。が、恐れることはない。そのミスは後進が矯正してくれる。箸にも棒にもかからないミスなら、無視される。

間違っているかもしれない、あとであっさり覆されるかもしれない、というのが学問のそもそのあり方であろう。それでも懲りずに、研究業績なるものを生産しつづける、それが研究者の性（さが）なのではないか。人類はそうやってオカルトをサイエンスに変え、新たなサイエンスが新たなオカルトを産んできた。